

プレスリリース
PRESS RELEASE
2021/7/6

アーツ前橋
ARTS MAEBASHI

「新収蔵作品展 2021」

—2019・2020 年度収蔵作品より—

2021 年 7 月 22 日(木・祝)～10 月 31 日(日)

I 期 7 月 22 日 (木・祝) ～9 月 5 日 (日)

II 期 9 月 11 日 (土) ～10 月 31 日 (日)



塩原友子《日月曼荼羅図屏風》1983 年



はじめに

アーツ前橋では、①地域ゆかりの作家の作品を中心にした収集、②美術館の諸活動に関連した作品の収集、③アートの創造力によって地域に貢献できる作品の収集という3つの方針に基づき、作品の収集活動を行ってきました。

本展では、近年の収蔵作品の中から未公開の作品を中心に、絵画、彫刻、写真、映像などの作品を、I期（2020年度収蔵）、II期（2019年度収蔵）の2部構成で展示します。また、作家の活動や作品制作の背景、展覧会、地域アートプロジェクト、ラーニング・プログラムなどの諸活動との関連、収蔵後の修復作業などについてもあわせて紹介します。

本展を通して、鑑賞者の皆さまに収蔵作品の魅力に触れていただくとともに、アーツ前橋の活動についての理解を深めていただくことができれば幸いです。

開催概要

【展覧会名称】新収蔵作品展 2021 —2019・2020年度収蔵作品より—

【会 期】2021年7月22日（木・祝）～10月31日（日）

I期 7月22日（木・祝）～9月5日（日）

II期 9月11日（土）～10月31日（日）

【開館時間】10:00～18:00（入場は17:30まで）

【休 館 日】水曜日

【会 場】アーツ前橋 ギャラリー1（1F）

【観 覧 料】無料

【出 品 作 家】

<I期・II期共通> 2019・2020年度収蔵作品より

塩原友子 | イルワン・アーメット&ティタ・サリナ | 河口龍夫

< I 期 > 2020年度収蔵作品より

田中正 | 野村誠 | 高橋武 | 長重之 | 鈴木のぞみ | 小森はるか + 瀬尾夏美 | 熊井淳一

< II 期 > 2019年度収蔵作品より

笠木實 | 岩崎孝 | 村上早 | 島岡實 | 三谷慎 | 田中朝庸

関連イベント

「学芸員によるギャラリーツアー」

【日 程】7/31(土)、8/21(土)、9/18(土)、10/16(土)

【時 間】いずれも14:00から

【参加費】無料

※ 要事前電話申込 各回先着10名 TEL 027-230-1144

※ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止・変更の可能性がありますので、当館HPまたはSNSで最新情報をご確認ください。

本展の見どころ

1. 近年の収蔵作品から、未公開の作品を中心に展示、紹介し、市民の財産である収蔵作品を間近で鑑賞する機会を創出する。一点一点に集中して鑑賞できる展示構成と、エピソードなども含めた解説によって、個々の作品の魅力に触れ、より身近に感じてもらう。
2. 開館時からの3つ収集方針にもとづき、継続的に行ってきた収集活動の紹介として、各収集方針を代表する作品を展示するとともに、当館で作品を収蔵する意義やその背景についてもあわせて紹介する。
3. 収蔵作品が当館のさまざまな事業（調査・研究、展覧会、地域アートプロジェクト、ラーニング・プログラム、収蔵後の修復など）と、どのような関わりを持っているのかを示し、収蔵作品を通して、当館の多様な活動についての理解を深めてもらう。

内覧会／プレス向けツアー

【期 日】2021年7月21日（水）

【時 間】15:00～17:00

※ 15:30 より出品作家(熊井淳一氏、鈴木のぞみ氏)と担当学芸員が作品を紹介します。

※ 要事前電話申込 TEL:027-230-1144

お問い合わせ先

アーツ前橋

前橋市役所文化スポーツ観光部文化国際課

担当：塚（広報担当）、北澤、大井田（学芸担当）

〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16

TEL:027-230-1144 FAX:027-232-2016 HP: <https://www.artsmaebashi.jp/>

E-MAIL: artsmaebashi@city.maebashi.gunma.jp

交通案内

●電車

JR 前橋駅北口から徒歩約 10 分

上毛電鉄中央前橋駅から徒歩約 5 分

●自動車

関越自動車道 前橋 I.C から車で約 15 分



※地図内 \square マークの駐車場のご利用に関しては、駐車券に割引処理いたします。

広報用画像

【1】



【2】



【3】



【4】



【5】



【6】



【7】



【8】



【9】



記事掲載についてのお願い

- ・掲載にあたっては、展覧会名称と会期を表記してください。
- ・画像等を掲載する場合は、キャプション・クレジット等を正確に表記してください。
- ・掲載記事やVTRは、資料として保管いたしますのでアーツ前橋までご送付ください。
- ・取材及び収録等の際は、必ず事前にお問い合わせください。

アーツ前橋企画展「新収蔵作品展 2021」 広報用画像申込書

アーツ前橋 広報担当 宛 FAX 027-232-2016

ご希望の画像の番号に○をつけてください。画像(JPEG)をメールにてお送りいたします。

*本展覧会の広報を目的とする場合に限り、提供致します。個人のブログ等への掲載や鑑賞等を目的とする場合には提供できません。

*掲載にあたっては、キャプション・クレジット等を正確に記載してください。

*以下全て 撮影：木暮伸也（クレジット表記お願いいたします）

*【1】はI期・II共通出展作品、【2】～【5】はI期出展作品、【6】～【9】はII期出展作品です。

番号	キャプション・クレジット等
【1】	塩原友子《日月曼荼羅図屏風》1983年
【2】	田中正《秋の空》2013年
【3】	熊井淳一《除角の雄山羊》2012年
【4】	長重之《視床》1983年
【5】	鈴木のぞみ《Other Days, Other Eyes:村田邸2階北の窓》2018年
【6】	笠木實《遊蝶の森》1995年
【7】	岩崎孝《話し合う四人》1982年
【8】	島岡實《赤い花》1961年
【9】	村上早《いぞん》2018年

媒体情報 *できるだけ詳しくご記入ください。

発行日：		発行元：	
貴社名：			
部署名：		担当者 名：	
所在地： 〒			
TEL：		FAX：	
E-MAIL：			

出展作家紹介(I期出展作家)

塩原友子

1921年群馬県前橋市生まれ、2018年逝去。初期の作品には、写実的な風景や人物が中心に描かれているが、1960年代に入り日本画の変革を目指す「日本画研究会」に参加。その後は伝統的な日本画の素材を用い、日本の風土や美意識によって培われてきた線や色彩などを用いながらも、コラージュの多様な展開や版画的な技法、幾何学的な画面構成を取り入れるなど、伝統的な日本画の概念を越え、枠にとらわれない独自の表現を模索し続けた。2021年には生誕100年を迎える。

イルワン・アーメット&ティタ・サリナ

イルワン・アーメット：1975年インドネシア生まれ、在住。ティタ・サリナ：1973年インドネシア生まれ、在住。2003年にアーメット・サリナ スタジオデザインを設立。2010年よりアートプロジェクトに着手。2017年にアーツ前橋滞在制作事業に参加。2015年「アジア・アート・ビエンナーレ」（国立台湾美術館／台湾）、2018年「つまずく石の縁—地域に生まれるアートの現場—」（前橋中心市街地）、2019年「闇に刻む光 アジアの木版画運動 1930s-2010s」（アーツ前橋）に参加。

河口龍夫

1940年兵庫県神戸市生まれ。多摩美術大学絵画科を卒業後、1965年にグループ〈位〉を結成。以来、現在に至るまで現代美術の最前線で活躍している。河口は鉄、銅、鉛、石、木、紙、種子など未加工の素材を用いて「時間」や「熱」といった目に見えないものを前景化させる作品を多数制作している。とりわけ「関係」は、河口の長いキャリアを統べる大きな作品テーマである。1974年、第1回井植文化賞受賞、2008年、第15回日本現代藝術振興賞受賞、2017年、第58回毎日芸術賞受賞。

田中正

1953年前橋市生まれ。川隅路之助に師事し、1973年、真下道明、岩井啓二とともに「ダダ」を結成する。雪舟の水墨画に絵画の可能性を感じ、2002年からボールペンを用いた静物画や風景画の制作を開始する。巨人と群衆が共存する独特な幻想世界を細密描写で描き出すことを得意とする。現在も塗装工として働く傍ら、旺盛な作家活動をつづけている。1998年群馬県美術家連盟「連盟賞」、2011年熊谷守一大賞展優秀賞、2014年日本の絵画展佳作賞、2015年第1回アートオリンピック金賞受賞。

野村誠

1968年愛知県生まれ、京都府在住。作曲家、ピアニスト、鍵盤ハーモニカ奏者。小学校2年生から自発的に作曲を始め、1990年に、即興演奏をベースに共同作曲するバンド pou-fou を結成。1992年、京都大学理学部卒業。1994年にはブリティッシュカウンシルの助成金を得て渡英。「横浜トリエンナーレ 2005 アートサーカス [日常からの跳躍]」(2005年)への参加やNHK教育テレビの音楽番組「あいので」の監修(2006年)など、多方面で活動し、美術家、ダンサーとの共演も多い。

高橋武

倉賀野町（現高崎市）生まれ。武蔵野美術学校本科日本学科卒業。在学中より群馬県美術展に多数出品するなど精力的な活動を始める。シャベル、ヘルメット、農婦など、労働をテーマにした具象作品を制作する一方で、俯瞰で描かれる田園風景は複数の色面へと還元され、具象とも抽象ともつかない独自の視覚効果を生み出している。1963年、美術集団「リアリスト」創立に関わり、1986年、高崎芸術短期大学助教授、2009年、群馬美術会副会長。

長重之

1935年に東京都日暮里に生まれ、1942年に父親の故郷である栃木県足利郡梁田村に疎開したのち、以降2019年に84歳で亡くなるまで足利を拠点に制作活動を続けた。足利県立足利高等学校で「VAN 洋画グループ」のメンバーに加わることで、従来の美術の様式からは距離をとる。1963年から1971年まで精神病院で作業療法士のアシスタントとして勤務した経験がその後の〈視床〉シリーズなどに繋がり、長の作品は、平面作品からパフォーマンスまで多岐にわたる。また、障がいをもつ作家たちとのコラボレーションも積極的に行った。主な個展に、「長重之展〈時空のパッセージ〉足利の来し方世界の行く末」（2008年、栃木県立美術館）、「長重之展－渡良瀬川、福猿橋の土手－」（2018年、足利市立美術館）などがある。

鈴木のぞみ

1983年埼玉県生まれ、東松山市在住。写真の原理を通して、日常の事物に光の痕跡として潜む「記憶」の可視化を試みている。窓ガラスや鏡、眼鏡など、長い年月、日常の生活空間に在り続けた事物に定着された光景は、それらが存在した場所で人知れず形成されていたイメージであり、撮影者の意思や主観を越えた視点でとらえた日常の風景である。「群馬青年ビエンナーレ」（2012年、2015年）や「中之条ビエンナーレ」（2013年、2015年）、rin art association（高崎）での個展（2017年）など、群馬県内での発表の機会も多い。

小森はるか+瀬尾夏美

2011年3月の東日本大震災のボランティアをきっかけに活動を始めた、映像作家の小森はるか（1989年静岡県生まれ）と画家で作家の瀬尾夏美（1988年東京都生まれ）によるアートユニット。2012年より3年間、岩手県陸前高田市に移住し、制作に取り組んだ後、2015年には土地と協働しながら記録をつくる組織、一般社団法人NOOKを設立し、仙台に拠点を移す。風景と人びとのことばの記録を軸に制作と発表を続けながら、対話の場の企画と運営も行っている。

熊井淳一

1938年浅草生まれ。埼玉県桶川市に疎開し、1965年に東京藝術大学大学院の彫刻専攻を修了する。熊井の彫刻は、ブロンズを素材とし、ロストワックス鋳造と呼ばれる。鋳造、仕上げまでの全工程を自ら行う。1987年に群馬県富士見村にアトリエを構え、山羊とともに暮らしつつチーズ製造も行う熊井は、自然の循環を基礎に、自らの生活の中から作品のモチーフを選び取る。1971年から高田博厚と藝大卒業生で構成される一元会のメンバーとして参加している。